

果樹

実況

1 ウメ

(1) 生育状況 (園芸研究センター)

園芸研究センター(美浜町久々子)における、休眠期間の平均気温は11月中旬から1月上旬にかけて、平年より高い傾向にあったが、1月中旬以降は平年より低い日が多かった(図1)。また、2月10日から降雪が続き、約60cm積雪した。1月31日調査の「紅サシ」花芽重(100芽重)は3.88gで平年より重く、前年と同程度だった(図2)。

「紅サシ」の開花始期(連続で開花した最初の日)は2月17日であり、平年の2月25日より8日早く、前年の2月14日より3日遅かった(表1)。

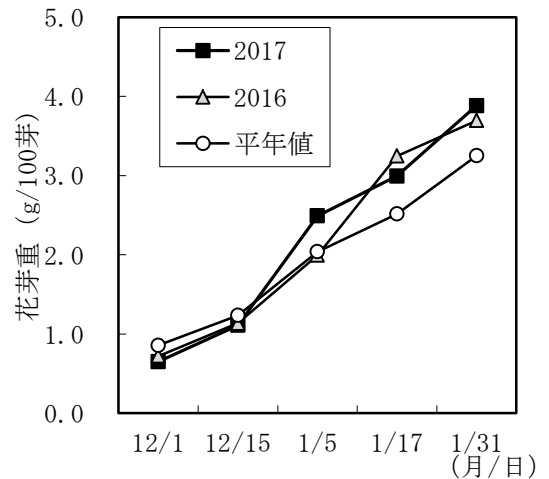
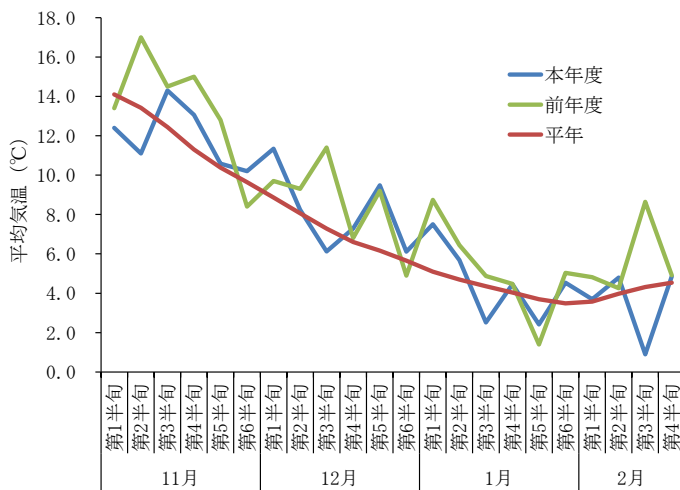


図1 11月からの半月別気温の推移
(以下、各図表とも観測地点：美浜町久々子)

図2 「紅サシ」花芽重の推移

表1 紅サシの年度別開花状況

年度	開花期(月/日)			開花日数 (日)	結実率 (%)
	始期	盛期	終期		
2017	2/17				
2016	2/14	3/03	3/14	30	38.3
2015	3/03	3/20	3/30	28	43.0
2014	3/04	3/18	3/26	23	52.2
2013	3/07	3/14	3/22	16	54.3
平年値(2007-2016)	2/25	3/11	3/22	27	22.3

(2) 地域状況

花芽の着生は全般に多いが、園地によるばらつきが見られる。

2月10日から12日にかけて30数年ぶりの大雪となり、小浜市や若狭町を中心に冠雪や沈降による雪害が発生し、骨格枝や側枝の折損が多数みられる。

2月16日現在、「紅サシ」は遊子など早場地域において20%以上開花し、標準的な地域では開花始め、遅場地域では1、2輪咲きの状況で、前年より5日以上遅く、平年より1週間程度早い。

ミツバチ巣箱は2月22日に導入された。

2 ナシ

(1) 生育状況（農業試験場）

「幸水」の発育速度モデルによる花芽の発育調査では、平年と同日、前年より7日早い2月3日に自発休眠から覚醒した(DVI 2.0)。2月22日現在の発育指数は2.157(DVI3.0到達で開花)であり、平年より2日早く、前年より1日早い。

開花の早晩は今後の気温の影響が大きく、これから気温の高い日が多くなれば開花は早まる。

(2) 地域状況

せん定、誘引作業は平年よりやや遅れている。えき花芽の着生は平年並みである。

ハウスナシは3月に入ると保温が始まる。

3 カキ

(1) 生育状況（農業試験場）

休眠期中であり、特に変わった点はない。

(2) 地域状況

せん定作業はほぼ終了した。

対 策

1 樹種共通

(1) 雪害後（樹体被害）対策

主枝や垂主枝などの骨格枝が裂けたり折れたりしている場合は、できるだけ引き上げてボルトやカスガイで固定し、支柱などで支える。乾燥防止、病害防止のために接合後に塗布剤で傷口を覆い、傷口から雨水や雪が入らないようビニール類で覆う。切断した付近に発生している発育枝や徒長枝は主枝候補枝として大事に育てていく。ナシなどで柵の番線が切れたり緩んでいる場合は張替えや締め直しを行う。

枝の基部から裂け落ちたりほとんど樹皮が残っていない場合など修復が困難な場合は、枝元で切り癒合促進のため傷口をできるだけ滑らかにし塗布剤を処理する。

樹体の修復がきわめて困難な場合は、新たに苗木を植えつけるなど更新の準備を行う。

2 ウメ

(1) ミツバチ巣箱の管理

結実の良否は、樹の貯蔵養分および花質・開花期間の気象条件に左右される。本県の推奨品種は自家結実性を備えているものの、結実率を高めるためにミツバチ放飼を行う。

巣箱は、風当たりの弱い場所を選び、出入り口を南面へ向け、巣箱の中へ雨水が浸入しないように入入り口をわずかに下がり勾配にして設置する。ミツバチが巣箱の外で活動している間に、少しでも巣箱の位置や方向を変えてしまうと、ミツバチが巣箱へ帰還できなくなるので、設置後は絶対に巣箱を移動させない。

雪が積もった場合は、天候の回復次第ミツバチが活動できるよう、入り口の前1m四方をすみやかに除雪し、着陸場所を確保する。また、巣箱の設置中は薬剤を散布しない。

巣箱を返却する際には、前日の夕方または返却当日の早朝に巣箱の出入り口を閉める。

(2) 病虫害防除

開花時期が平年よりも早くなっており、開花終了後から展葉までの期間が長くなると予想されるので、開花終了期の防除タイミングを逃さないように注意する。

灰色かび病は満開から開花終了までの期間が長引くと多発するので、落弁期(花卉の80%が散った時期)に、また、かいよう病のり病枝が多い園では、葉芽が発芽する前に防除を行う。

(3) 施肥「芽出し肥」

春先からの新梢伸長を促進し、樹勢を維持するために3月下旬に芽出し肥を施用する。成木の施用量は福井ウメ専用肥料「梅の力」で1樹当たり2.0kg(10a当たり40kg)を目安とする。エコファーマーの認定を受けている場合は、化学肥料施用割合の低減と有機物の施用に留意する。

(4) 石灰類の施用

ウメは石灰の吸収量が多い果樹である。しかし、石灰類(アヅミン苦土石灰・消石灰など)を連年施用してきた結果、土壌pHが7.0を超える圃場やカルシウムの残存量が基準値を超える圃場もみられるため、石灰類は土壌分析結果を参考に施用する。土壌pHが低く酸度矯正が必要な場合に10a当たり150~200kgを3月と9月に分けて園地全面に散布する。なお、春季に石灰類を施用する場合は「芽出し肥」とは10日以上の間隔をあける。

(5) 春季の接ぎ木

春季の接ぎ木は切り接ぎ法で行う。

接ぎ木の適期は、苗木養成では3月中旬から3月下旬、品種更新のための成木への高接ぎでは3月中旬から4月中旬である。適期に作業ができるよう、あらかじめ穂木や接ぎ木に用いる道具・資材などを準備しておく。

作業前日に、葉芽を3つ程度つけた状態で穂木を切断し、接ぎ木テープ(ニューメダール)を巻き上げた状態で、プラスチック製の食品保存容器などに入れ、冷蔵保管しておく。

切接ぎを成功させるポイントは、①穂木を乾燥させずに低温で保存しておく、②樹液の流動が始まった時期に接ぐ、③穂木・台木ともに接着面が平滑になるように、穂木・台木を調製する、④穂木・台木の形成層(樹皮直下の養水分の通り道)がお互いに密着するように固定することである。



写真 調製した穂木

3 ナシ

(1) 短果枝の整理

いずれの品種も着果量は1㎡当たり10果程度であるから、花芽数は1㎡当たり20~30芽あれば十分である。これ以上の花芽が着いていると、貯蔵養分を浪費するばかりでなく、受粉・摘果作業などに多くの労力を費やすことになる。

「豊水」や「二十世紀」など花芽数の多い品種では、開花前に花芽の整理を行う。「幸水」など花芽が少ない品種でも、短果枝の先端部に複数着生した小さい花芽は整理して、樹の負担を軽減する。

(2) 芽出し肥の施用

春先からの新梢伸長を促進し、樹勢を維持するために、3月上中旬に芽出し肥を施用する。追肥用

肥料を用いて年間施肥量の10～20%程度を目安に施す。

(3) 病害虫防除

3月中下旬のリン片がずれ始めたころに、「二十世紀」は黒斑病を対象として、パスポートフロアブル250倍液などを、「幸水」・「豊水」などの赤梨は黒星病・サビダニ類を対象として、石灰硫黄合剤7倍液を散布する。

4 カキ

(1) 整枝・せん定

せん定作業を終えていない園地では、早急に作業を進める。

主枝は3本とし、亜主枝は1主枝につき2本程度配置する。隣の主枝から発生している亜主枝からは1.8～2.0mの間隔を保ち、平行に配置する。

低樹高化をめざす余り、主枝・亜主枝の先端新梢の角度が低くなりすぎている園が見られる。骨格枝先端の新梢の勢いが弱いと、徒長枝が乱立し樹形を乱す原因になるので、必ず骨格枝の先端は立てるとともに、骨格枝先端の新梢は切り返す。

せん定作業がひととおり完了した園でも、他人がせん定した視点で園内を見回り、主枝・亜主枝の先端の切り返しや結果母枝数・側枝密度などを確認し、気づいた部分は補正せん定を行う。

(2) 晩霜対策

近年、春先に霜が降ることが多いので、霜害対策に万全を期す。

繁茂した雑草や敷きわらなどのマルチは、日中は地温上昇を妨げ、夜間は地熱放射を妨げて、霜害を助長する。春先はマルチはせず、草も短く刈り込む。冷気の流れる道筋に防風垣などの遮へい物があると冷気をせき止めて霜害を助長するので、防風垣のすそ部を刈り込み、冷気が流れやすいようにしておく。

スプリンクラーによる散水氷結法(※)を行っている園では、早めにスプリンクラーの点検を済ませておく。

3月下旬以降は、発芽が近づき霜害を受けやすくなる。夜になって空が澄みわたり底冷えするような場合は、霜害発生の危険性が高くなる。この時期は戸外に温度計を設置しておき、午後8時の気温が5℃以下の場合は散水の準備に入り、気温が0℃近くまで下がってきたらスプリンクラー散水を実施する。

※ 水が凍結する時に放出する潜熱を利用して、樹体が0℃以下にならないようにして霜害を防ぐ方法

(3) 病害虫防除

越冬病害虫を対象として発芽前に石灰硫黄合剤を散布する。薬剤がスプリンクラーヘッドにかかると錆びつくので、石灰硫黄合剤の散布時は、必ずビニール袋などでヘッドを覆う。

アザミウマ類やカイガラムシ類の耕種的防除として粗皮削りを行う。特に、枝の分岐部や薬剤のかかりにくい主枝下部では、越冬害虫の生息密度が高いので念入りに実施する。

(4) 石灰類の施用

昨秋に石灰類を施用していない園では、土壌pHを測定して、適正量を施用する。

5 イチジク

(1) せん定

凍害の恐れのある地域では、厳寒期を過ぎた3月上旬に仕上げせん定を行う。

一文字仕立ての結果母枝密度(ハウス栽培)は2,000本/10aである。密度が高いと着果不良や着色不良の原因となる。今のうちに密度を確認して、結果母枝数が多い場合は整理する。

(2) ハウス管理

最低気温が氷点下にならなくなった(3月中旬頃)、ハウスを締め切り、夜間の保温を開始する。日中は25~30℃を目安とし、晴天日はハウスサイドや天窓を開けて温度が上がり過ぎないように管理する。発芽後は、40℃以上の高温が数時間続くと高温障害を受け、芽が枯死するので注意する。

また、保温を開始する2~3週間前からかん水量を増やし、土壤水分をやや高めに保つと発芽揃いが良くなる。ハウス内の土壤が過湿にならないようにハウス周辺の排水溝の整備を行う。

6 ブドウ

(1) ハウス管理

3月中旬以降に十分かん水して、ハウスを締め切り、保温を開始する。発芽期は湿度を必要とするため、土壤が乾燥したらかん水を行うが、発芽後は湿度が高すぎると灰色かび病などが多発しやすいため、適度なかん水とする。